# 放送番組センターレポート

BROADCAST LIBRARY Report

2018.04 No.34

（公財）放送番組センター


〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110
http://www.bpcj.or.jp/


TOPICS 今号のトピックス


■公開トークショー　第15回人気番組メモリー『世界ふしぎ発見！』
■公開セミナー　第45回名作の舞台裏『太陽の子～てだのふあ』
■12～2月開催の上映会、企画展
■大学や公共施設での番組利活用
■理事会、放送番組収集諮問委員会を開催
■放送ライブラリー公開番組の紹介


## ■公開トークショー　第15回人気番組メモリー『世界ふしぎ発見！』

2月24日、公開トークショー 人気番組メモリーを開催した。今回は、1986年の番組スタートから30年を超えるTBSのお馴染みのクイズ&トーク番組『世界ふしぎ発見！』を取り上げた。長年、多くの視聴者に愛されてきた番組とあって、1500名の参加応募者があった。

[登壇者]　草野　仁（番組司会者）
　　竹内海南江（ミステリーハンター）
　　重延　浩（プロデューサー）
[司　会]　八木康夫（放送人の会）

番組スタートは1986年4月。当時、重延氏が書いた手書きの企画書がスクリーンに映し出された。「セブンミステリー・ワールドアドベンチャーショー」というタイトル。そしてツタンカーメンの仮面の絵と共に「まったく新しいコンセプトのテレビジョンが眼をさまします。」の文字。

草野氏は「『あなたもインディ・ジョーンズになってみたいとは思いませんか』という見事なうたい文句と、この番組は“歴史と楽しく遊ぶ”と書かれており、大変素敵な企画書だった」と振り返った。それでも「スポーツ放送、報道系番組の司会の経験しかないので無理です」と断ったが、重延氏の「新しいタイプの司会者像を作ってもらいたい」という言葉に最終的にOKした。重延氏は「黒柳さんにも最初は断られた。黒柳さんは、ご自分の時代の学校の教科書は大事な所が真っ黒に消されていたため、私は本当の歴史を知らないとおっしゃったので、この番組は歴史を勉強できますと伝えたら、それでは、出演の条件として、どこに行くかだけは事前に教えて欲しいと言われた。それが分かれば勉強が出来るからと。だから黒柳さんだけではなく、解答者全てに教えている。黒柳さんは、1回に7冊くらい本を読んでくる」と明かした。黒柳徹子さんは、第1回から一度も欠席した事がなく、どんなに忙しくてもこの勉強を欠かしてきた事はないという。

ここで、記念すべき第1回の放送を映像で紹介。勿論、取り上げたのはエジプト。草野氏は「1回目は、司会をする事に夢中だった」と懐かしんだ。こうして番組はスタートしたが、重延氏は「最初は苦戦の連続だった」と振り返った。第1回の視聴率は6%台、3回目は3%台にまで落ち込んだ。この番組はすぐ終わるだろうという記事まで書かれた。7回目までは1桁止まり。「8回目に突然2桁になった時教えられた」と重延氏。「7回目までは誰もが知っている古代文明を取り上げ、上から目線で視聴者に教えるというイメージがあった。8回目にタイのある民族の所に行ったら日本と同じ納豆があり、その納豆に出会ったミステリーハンターがとても自然に驚いた。そういった視聴者に近い感覚がよく伝わったのだと思う。それ以来、上から目線ではなく、皆さんと一緒に体験しながら、一緒に歴史を学ぼうと思った」と当時の心境を語った。この“一緒に学ぶ”役割がミステリーハンター。ミステリーハンターとして200回以上出演している竹内氏は、放送2年目の11月のパリ万博の回から登場。「パリ万博に日本のお侍さんたちがやって来たという事で、いきなりお侍の格好と芸者の格好から始まった」と笑った。

『世界ふしぎ発見！』は企画から完成まで1本平均3か月半から4か月かかる。リサーチ、取材先との交渉から始まり、様々な工程を経て完成する。スタッフの努力により完成度の高い番組が生まれる。更に、出演者が魅力的な番組にする。「出演者の皆さんの良さをどんな形で引き出そうかということをいつも一生懸命考えている」と草野氏。重延氏が「草野さんはゲストが書いている答えに、当たっているのに外れているような顔をしたり、外れているのに当たっているような顔をしたり、巧みなテクニックを使っている」と話すと、草野氏は「これは対黒柳さん作戦。黒柳さん、私の一挙手一投足に凄く注目しているので」とスタジオの様子を語った。

ロケ現場の主役ミステリーハンターの魅力も、この番組が長く愛される理由の一つ。「どこでも寝られる、何でも食べられる、体が健康である、という事が大きな条件」と竹内氏。一番大事な持ち物はという問いに「スタッフの健康管理を考えて、どこでも美味しくものが食べられるように、お塩や辛いものが好きなスタッフのためには七味を持っていく。スタッフが元気におなかを壊さずに仕事ができるものを考えて用意する」と答えた。水が手に入らない所を何日も歩くロケで、竹内氏がスタッフのために計画的に水を残していたというエピソードに、草野氏が「取材班の母ですね」と言うと、竹内氏が「昔は娘だった」と返した。竹内氏らの活躍により、ミステリーハンターになりたいという若い女性が増えたが、取材の大変さを知っている竹内氏はいつも「決していい仕事ではない」と答えている。

ここで、竹内氏がピラミッドに登った回（2005年）を上映。ピラミッド登頂は1983年から全面禁止になり、世界各国の調査隊が申請しても一切許可が下りなかったが、この時、奇跡的に『ふしぎ発見！』だけに許可が下り、この撮影が実現した。

『世界ふしぎ発見！』は、日立の一社提供。現在、キー局のゴールデンタイムで1時間番組を一社で提供しているのはこの番組だけという。「視聴率の悪かった時、日立の宣伝部長が『君が正しいと思っているのだったら、そのままやりなさい』と言ってくれた」と重延氏。その言葉に励まされ、その後、番組の視聴率は上がっていき、30年以上続く人気番組となった。重延氏が「今は、若い人の見たいものなどバランスを考えて、様々な組み合わせを取り入れながらテーマを変えている。但し、“歴史と遊ぶ”というコンセプトだけは変えないという事を貫いている」と語り、重延氏が尊敬する名プロデューサー故横澤彪氏や佐藤孝吉氏に、「『世界ふしぎ発見！』は新しい。新しい事をやっているから新しいのではなくて、いつのまにか知らないうちに番組を少しずつ変えている。この変わり方が一番上手だ」と同じ褒め言葉を言われたエピソードを紹介した。

『世界ふしぎ発見！』は来年の初頭1500回を迎える。「原点は変えず、時代に即して少しずつ変化させていくという姿勢で、良質な番組を作り続けていく」と重延氏。『世界ふしぎ発見！』の旅はまだまだ続く。

## ■公開セミナー　第45回名作の舞台裏『太陽の子～てだのふあ』

1月13日、制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。『事件』『夢千代日記』『あ・うん』等、数々の名作を生んだ、NHK「ドラマ人間模様」枠で放送された『太陽の子～てだのふあ』を取り上げた。本作は、神戸に住む天真爛漫な小学生ふうちゃんと沖縄出身の家族の暮らしを通じて、沖縄と日本の戦後に新しい問いかけを発した、灰谷健次郎の児童文学をドラマ化したものである。

[登壇者]　中村　玉緒（出演）　長谷川真弓（出演）
　　重森　孝子（脚本）　菅野　高至（演出）
[司　会]　渡辺　紘史（演出・放送人の会）

1982年秋に5回に渡り放送された『太陽の子～てだのふあ』。今回登壇した5人が揃うのは、実に35年ぶり。当時11歳だった長谷川氏も、ラストシーンのふうちゃんの台詞のとおり、男の子と女の子の二児の母になった。

この作品の企画の経緯について菅野氏は、原作の『太陽の子』が発行される前に見本版で読み、「ぜひテレビドラマにしたいと感じた」と振り返った。しかし、他局の単発ドラマや映画がNHKより先行して制作されたため、企画が実現し、放送に至ったのは、ちょうど沖縄本土復帰10年のタイミングとなった。

本作で演出を務めた渡辺氏は、キャスティングから制作に合流した。ふうちゃんの母親役に中村氏を起用した理由は、別の作品で母親役を演じていたのを見て、「いいお母さんだな」と思ったから。ふうちゃん役は、先行して制作された二作品では、大柄な子が起用されていた。しかし渡辺氏は、「みんなが応援したくなるような健気さがあり、一生懸命沖縄のことやお父さんのことを知ろうとするのは、むしろ小柄な子のほうが良いと思った」と当時の心境を語った。そのイメージに長谷川氏がぴったりとはまり、起用に至った。長谷川氏は未だに「ふうちゃん」と呼ばれることもあるという。そのことは、それだけ長谷川氏が演じた「ふうちゃん」が、人々の記憶に鮮明に残っていることを表している。長谷川氏も、この役に出会っていなかったら、役者を続けていなかったかもしれないと振り返るくらい、印象に残っているという。

当時の撮影の様子について、「非常に和やかだった」と、中村氏が振り返った。特に、ふうちゃんの父親役の井川比佐志氏は、時には優しく時には厳しくと、本当の父親のように長谷川氏に接していた。撮影時の話になると、波照間島ロケでの思い出話に花が咲いた。石垣島から波照間島に向かうチャーター便が、台風の影響で揺れたために船酔いしたことや、宿泊先でのエピソードなどが、次々と語られた。一方、脚本担当の重森氏は、2年で約80本、ほぼ1週間に1本のペースで脚本を仕上げるという、多忙な日々を送っていた。

長谷川氏が「ファミリーみたいに感じていた」と話すと、中村氏も「ファミリーが勝手に出来上がっていた」と語った。また、この作品をきっかけに、原作者の灰谷氏と長谷川氏の間にも強い絆が結ばれた。「灰谷先生は、大柄でショートカットで元気なふうちゃん像があったので、スタジオに見に来てくださった時、私がふうちゃんを演じることをすごく心配していたが、放送後、『すごく良かった』とおっしゃってくださった」と長谷川氏が振り返った。その後も公私ともに交流を持ち、灰谷氏の自宅にも遊びに行く間柄になった。

セミナーの終盤では、この日登壇が叶わなかった父親役の井川氏からの手紙が紹介された。「『太陽の子』放映後35年を経ったのに沖縄の現実は少しも変わっておらず、米軍の基地と沖縄に生きる人たちの問題は解決されない。戦争は終わっても戦後は終わらない。『太陽の子』に描かれたふうちゃんや青年たちはまっすぐに大人になっていってほしい。戦争とは無縁の日本の未来の地図を正確に描いてほしいと願います」読み終わると会場から拍手が沸き起こった。作品の鑑賞、セミナーと井川氏からのメッセージを通じて、改めて沖縄に思いを馳せる一日となった。

## ■「震災関連番組を視聴する会」を実施

2月6日から8日までの3日間、横浜情報文化センター7階大会議室で、「番組を視聴する会」の2回目を実施した。今回は『震災を伝える・記録する・考える』と題して、阪神淡路大震災と東日本大震災に関する公開番組の中から、ラジオ番組2本を含む6本を取り上げた。

また会場の一角には、福島県立図書館から提供された「東日本大震災福島県復興ライブラリー」を設置し、来場者が自由に閲覧できるようにした。これは、同県内の被災・復興の様子をパネルで紹介し、60点あまりの関連書籍とともに展示するもので、会期終了後の9日からは場所を放送ライブラリー内に移し、3月18日まで展示した。来場者は延べ162人。上映・視聴した番組は、『一文字弥太郎の週末ナチュラリスト　朝ナマ！』(2015年・中国放送ラジオ)、『映像記録　あの日あの場所、あの人と』(2015年・毎日放送)、『NHKスペシャル　最期の笑顔　～納棺師が描いた東日本大震災～』(2012年・NHK)など。

## ■『忍たま乱太郎』アニメ放送25年！展

12月15日～2月12日、放送開始から25年目を迎えた、アニメ『忍たま乱太郎』(NHK Eテレ)の企画展を開催した。番組の歴史年表やキャラクターパネルのほか、設定画や実物のセル画と台本などを展示。さらに、折り紙を忍術学園の教室セットで楽しめる体験型コーナーを設置した。会場では、女性たちが撮影を楽しむ姿が見られ、体験型コーナーでは、子供たちが、ぬり絵や折り紙に挑戦した。期間中、約1万3千人の来場者があり、幅広い世代が楽しめる企画展となった。

## ■平昌オリンピック開催記念 特別展示会

第23回オリンピック冬季競技大会(2018／平昌)の開催期間(2月9日～25日)を中心に、競技中継の視聴や関連展示を行い、オリンピック放送を盛り上げた。会場では、日本代表選手団オフィシャルスポーツウェアや歴代冬季大会のマスコット・聖火用トーチの展示のほか、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会コーナーも設置した。注目競技の放送時間には多くの来館者が集まり、日本選手の活躍を見守った。

## ■大学や公共施設での番組利活用

［三重短期大学］

生活科学科生活科学専攻「社会福祉援助技術論Ⅰ」（武田誠一准教授・後期）で、テレビ番組1本が利用された。この講義は、相談援助（ソーシャルワーク）の基本理念や共通課題等を学び、相談援助の過程で必要となる知識や技術について理解を深めることを目標としている。利用した番組は、認知症や高齢化をテーマにしたドラマ『心中津軽十三湖（1999年・CBCテレビ）』で、武田准教授からは「現在とは大きく異なる当時の社会的背景を理解するために、とても有益な資料となった」との評価を得た。メディア関連以外の授業での利用申し込みは、本件が初めてである。

［公共施設］

広報活動の一環として、公共施設向けの利用案内パンフレットを作成し、視聴覚資料の利用状況調査アンケートと併せて全国の都道府県立図書館（約50館）に送付した。今後、アンケートの結果を分析し、事業展開に活用していく。

また現在も継続して以下5施設で視聴ブースを運用しており、各施設のテーマに合った番組を視聴可能としている。

◇諫早市立諫早図書館／脚本家 市川森一氏関連　16本
◇広島平和記念資料館／平和、原爆関連　13本
◇長崎原爆資料館／平和、原爆関連　8本
◇岡山県立図書館／岡山県関連　27本
◇市川市文学ミュージアム／脚本家 水木洋子氏関連 25本

## ■放送番組収集諮問委員会開催

3月16日に第26回（平成29年度）放送番組収集諮問委員会を開催し、以下の4項目について事務局から報告した。

（1）番組の収集、保存、公開状況について
（2）サテライト・ライブラリー及び大学での教育利用の運用状況について
（3）平成30度事業計画、収支予算について
（4）デジタルアーカイブジャパンの動向について

事務局の報告を踏まえて、委員からは以下のような意見、提言があった。

**◇保存公開番組の充実**

番組アーカイブとして番組ラインナップの充実を図っていくことは非常に重要である。そのためにも、過去にさかのぼって体系的に番組を収集する方法を導入することは必須である。

**◇全国展開事業の推進**

効果的なPR活動を展開して、サテライト・ライブラリーと大学での教育利用の充実を図ることが重要である。

**◇存在意義の強化**

教育の情報化に対応した著作権法の一部改正の動きなど、社会全体の流れが大きく変化していく中で、放送番組センターも時代に適合していくことが重要である。

## ■理事会開催

2月23日開催の第2回理事会で、平成30年度事業計画・収支予算が承認された。概要は次の通りである。

◇平成30年度は「次期5年間（平成30～34年度）の事業方針」に基づいて事業を実施する初年度であり、「公開番組の一層の増加」「事業の全国展開」「放送事業者の理解・協力の推進」を重点項目とし、前期5年間の成果を踏まえて、事業基盤の強化に取り組む。
◇番組の収集・保存・公開は、保存対象番組の着実な収集、権利処理の推進による公開本数の増加、過去にさかのぼった体系的な収集による、公開番組の充実を図る。
◇全国展開は、各地の公共施設へ提携先を募る。教育利用では、大学の教員を対象とするセミナー開催などで利用増を図る。
◇ファイルベースによる番組受け入れの整備と、2020年度予定の番組視聴システム更新に関する課題を整理する。
◇放送文化の振興に寄与する企画展、公開セミナー、番組上映会の通年開催、訪日外国人を念頭に外国語字幕・副音声付番組の保存公開に向けた検討を進める。
◇基本財産の運用は、財産総額を100億円に積み増し、運用利率2％台を維持することを目標とする。民放とNHKの出捐金は今年度と同額の1億6,170万円を要請する。
◇これらの事業を実施するための収支予算は、経常収益3億8,300万円、経常費用3億8,033万円を計上する。

## ■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーではテレビ番組16,240本、ラジオ番組4,337本、テレビ・ラジオCMを10,796本、劇場用ニュース映画2,683項目を横浜の施設内で無料公開している。12月から2月に追加公開した主な番組は以下の通り。

【テレビ番組】

◇『津軽のミサオさん　笹餅、ときどき五・七・五』2015年5月30日放送・青森放送
◇『テレビ60年記念ドラマ　メイドインジャパン〔1〕、〔3・終〕』2013年1月26日、2月9日放送・NHK
◇『ウッティ発！　アンニョンハセヨ！ワタシ桑ノ集落再生人』2015年5月27日放送・テレビ山梨
◇『RSK地域スペシャル　メッセージ　島の命を見つめて　～豊島の看護師・うたさん～』2016年3月23日放送・山陽放送
◇『報道の魂　亀裂　諫早湾干拓に翻弄された漁業者たち』2015年4月6日放送・長崎放送

【ラジオ番組】

◇『FMシアター　夕凪の街　桜の国』2006年8月5日放送・NHK
◇『1／6の群像』2017年5月27日放送・CBCラジオ
◇『メロディーの向こうに　童謡・唱歌の世界』2017年3月26日放送・山口放送